

デング熱ってなに？

☆デング熱は、デングウイルスを持った蚊に刺されることによって生じる、急性の熱性感染症です。

◆感染経路

感染蚊に刺されることによって、人→蚊→人へ感染する。感染力は極めて強い。人から人へ直接感染することはない。媒介蚊はネッタイシマカ、ヒトスジシマカ。ヒトスジシマカは日本のほとんどの地域(北海道を除く)で見られる。ネッタイシマカは日本に常在していない。

流行地は熱帯・亜熱帯地方(特に東南アジア、南アジア、中南米、カリブ海諸国)であるが、アフリカ、オーストラリア、中国、台湾においても発生している。海外渡航で感染し国内で発症する例が増加しつつある。感染した日本人帰国者や外国人旅行者が国内で蚊に刺され、その蚊が他者を吸血した際に感染する可能性がある。

◆病原体

デングウイルスはフラビウイルス科に属し、4つの血清型(1型、2型、3型、4型)が存在する。

いずれの血清型によっても同様の病態を示し、症状からは感染したウイルスの型は分からない。

同じ型のウイルスに再び感染しても免疫によって軽症ですむが(終生免疫)、他の血清型に対する防御免疫は数カ月で消失するため、その後他の型には感染しうる。この2度目(異なる型)の感染時に、重症化する確率が高くなるといわれている(デング出血熱)。

2つの血清型に感染した後は、一般的には3度目(第3の血清型)の感染はないとされている。

◆症状

デングウイルスに感染しても、多くの場合(約50～80%)、不顕性感染(症状が現れない)に終わると考えられている。

デング熱は蚊に刺されてから2日～15日(多くは3～7日)の潜伏期間の後、突然の発熱で始まり、頭痛、眼窩痛、筋肉痛、関節痛が主症状として表れる。

発症後数日してから、胸部・体幹から始まる発疹が出現し、四肢・顔面へ広がる。

これらの症状は1週間ほどで消失し、通常後遺症なく回復する。致死率は1%以下。

デング出血熱は、デング熱と同様に発症し経過した一部の患者において突然、^{けっしょうろうしゅつ}血漿漏出と出血傾向を主症状とする致死性病態で、治療をしないとショックを伴う例の致死率は40～50%と高い。病院の適切な治療を受ければ通常5%以下である。

デング出血熱はほとんど流行地(二型以上のデングウイルスが存在している地域)の現地人(主に小児)の間に発生している。

◆治療

対症療法が中心となる。デングウイルスに対する特有の薬はない。

痛みと発熱に対しては、アセトアミノフェンなどの解熱鎮痛剤を使用する。ただし、アスピリン等のサリチル酸系統の解熱鎮痛剤の使用は、出血傾向を助長させるため避ける。

◆予防

蚊に刺されない工夫をすることが重要。

長袖・長ズボンの着用や、忌避剤の使用など。

ワクチンの開発は行われているが、実用化はまだされていない。

「デング」という名前の由来は、1827～1828年カリブ海諸国に流行した発熱と関節痛を伴う疾患にあるといわれています。スワヒリ語で“悪霊による突然のけいれん様発作” Ri denga pepo がスペイン語の同音異語の dengue となったそうです。

日本では、輸送船により患者・感染蚊を媒体として1942～1945年に長崎、神戸、横浜を中心とした日本の港湾都市に患者が多発しました。ウイルスは日本に導入されて二次患者を発生させましたが、幸い越冬土着することなく終わっています。



デング熱を媒介する

ヒトスジシマカについて

◆特徴

成虫は体長約4.5mmの小型種。

胸部背面中央に1本の銀白色の縦線があり、これが和名の由来となっている。

胸部背面後方にはW字型の銀白色の模様がある。

◆発生源

幼虫はバケツ、空き缶、古タイヤ、墓地の花立て、植木鉢の受け皿などの人工容器や、雨水マス、樹洞や竹の切り株などの小水域に発生する。

雌成虫が、これらの水際側面にばらばらに約80卵を産卵する。

卵は乾燥に耐え、降雨で水位が上昇して水に浸かると孵化する。



雨水マス



植木鉢の受け皿

◆生態

日本では北海道を除き、ヒトが最もよく刺される蚊。

昼間活動的で、木陰などで激しく人から吸血する。

屋内にも侵入し、夜間電灯下でも吸血することがある。

吸血活動の最盛期は、相対湿度の高まる午後4時～6時頃で、温度22～26℃、照度200～6000ルクスの条件下が最適である。

移動範囲は狭く、100m程度なので、発生源を特定しやすい。

本州から九州では、成虫は5月の連休後に現れ、8月に発生数が最も多くなる。

その後9月には激減して、10月あるいは11月ごろまで成虫が飛来する。

幼虫・蛹は11月～12月に寒さで死滅して、卵のみが越冬する。

デング熱ウイルスを経卵感染(卵を通じて次の世代の蚊に伝播)することが可能であるが、冬を越した卵からデングウイルスが検出されたという事例は今のところ確認されていない。

◆防除法

発生源が小水域で行動範囲が狭いので、探し出して土で埋めたり、容器は蓋をするか始末する。

野外にタイヤや人工容器を放置しないように心掛ける。花瓶の水などは週に1度は交換する。

庭の壺や雨水マスには金網でしっかりと蓋をしたり、殺虫剤を入れておく。

墓地や公園などでは、活動シーズン中は清掃に心掛け、必要に応じて蚊が生息している草むらを殺虫剤散布する。

茂みを除去すれば休息場所がなくなるので、成虫飛来数は激減する。

★プロによる害虫駆除作業★

- ・雨水マスや人工容器等、蚊幼虫の生息している場所に殺虫剤(昆虫成長制御剤)の投入
- ・植栽等、蚊成虫の生息している場所に殺虫剤(ピレスロイド系もしくはピレスロイド様)の残留処理または空間処理



2014年 代々木公園での蚊駆除作業に協力しました。



発行 アペックス産業株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2-23-4

TEL: 03-3455-6474

FAX: 03-3455-6558

URL: <http://www.apex-sangyo.jp>